

(90)

Doc No. 3081



(昭和十三年十二月)

事變外交に就て

日本外交協會第二百九十四回例會席上
前特命全權大使本多熊太郎氏述(要旨)

日本外交協會

IMT 551

1

お断り

本篇は本多氏の本會例會に於ける口演要旨を筆録したるものにして、會員の希望に依り之を複寫すと雖も、本多氏の十分なる査閲を経ざるものに付、其の責任は當協會に在るものと御承知相成度。

昭和十三年十一月

日本外交協會調査局

事變外交に就て

目次

緒言

一、	米國の對日通牒と其の魂膽	一
イ	第一は選舉對策	六
ロ	ミュンヘン協定の影響	七
ハ	前年のシカゴ演説の敷衍	一二
ニ	懷中電氣式外交の愚	一四
ホ	米國の極東對策と現認識	一五
ヘ	よくない米國の對日意識	二一
二、	英國の苦境	二五
イ	「英國に非違なし」論者	二五

日	チェッコ問題に現はれた英國の態度	一九
二	ドイツに屈服後の英國の朝野	二五
三	軍備擴張に一致した英政界各派	三九
三	佛蘭西の顛落	四二
四	伊太利と地中海の制覇	四八
イ	地中海と英伊關係	五〇
ロ	日伊海軍協定の必要	五三
五	英獨の武力競争激甚	五六
六	日英關係	五九

—— (目次終) ——

事變外交に就て

本多 熊太郎氏述（要旨）

緒言

「事變外交に就て」と云ふ題が出て居るやうであるが、私は實は必ずしもさう云ふ話をしようかと考へて居った譯ではない。併しいづれにしても事變と交渉と云ふ話には出来ない。例によりて順序を立てし話すだけの用意をする暇がなかつた。其の段は豫じめの御容赦を願ひ置く。

一、米國の對日通牒と其の魂膽

去る十月六日の日本に對するアメリカの抗議、即ち、例に依つて機會均等、門戸開放の違反呼はり——甚だしきは日本内地に於ける爲替管理令の運用がアメリカ人に對して差別的に行はれて居るのだとか、曰本内地のことまでも一切台切抗議して居るやうであるが、あの十月六日のアメリカの抗議を大変心配して居られる御方が少くないやうである。私はアレを新聞で見えた時に、格別意に介しなかつた。少しも驚きもしなかつた。勿論外交上の一新局面の發生などは毫しも考へてゐない。所が私の尊敬する懇意な某大將、之は頭腦精敏を以て聞こえて居る大將である。その大將から「本多さんは之をドウ云ふ風に處理すれば宜いと云ふ考だらうか、君、本多さんに會つたら聽いてくれ」と言はれて、私の所に入出入の或る人が「時にアメリカの抗議はどうでせうか」「アメリカの抗議と云ふのは何だ」「ア

ドヴァアタイザーにテクストが出て居るさうですが、十月六日附の公文です。實は大將がソレを心配して居られて「云々少しツイスキでも飲み過ぎてドウかして居られるなど私は思ふた。私曰く「アドヴァアタイザーのアレのことか、アレなら何もソウ驚くことはない。アレは俺が當局だったら、即刻ドクトル・ベーターに書かせてサツさと回答してしまつてる。あの米國公文は其の内容と云ひ弁證法と云ひ全然法廷に出す告訴狀式に出来て居る。法律的技術で捏つち上げて居る。コケラも宜しく原告訴狀の弁駁と云ふ氣持で法律的技術事項として取扱ふべきだ。幸いにして少なくとも世界の國際法學界に歴とした存在を有するベーター博士が外務省に居るのだから、此の人にたんで此の回答文を書いてもらふが良い」

「ソナナことよいでせうか」

「それによい。第一、アメリカがアノ抗議の趣意を實行に移さうと云ふには、まだ準備が出来て居らぬ。またソウ云ふ考ぢやない。準備とは武力のことだ、その武力が當分出来上らない。只今大いに勉

廻して武力を拵へようとして居るのだ。ソソなら経済的の手段で来るのかと云へば、是れも成算あつてのことではない、一体我輩は昨年の事変勃發當初から、日本としては萬一の場合を慮つて重要軍需原料品の配給統制までせねばいかぬぞと云ふことを言つて居るのであるけれども、それは日本としての覺悟を説いたので、先方の立場について云へば、アメリカ一國で日本に對する石油とか鐵とかの賣込を止めて見たところで、他の國から賣込めは何もならぬ。だから各國の話を纏めてアメリカがリーダーで皆んなで以て日本に掛つて来るやうにせねばならぬが、今日は彼等列國間の氣合はまだソコまで来てゐない。又アメリカ一國だけに付いて言ふも、日本が餘程利口のためか、或は又事情が日本をして機巧な行き方に出でさせたのかは知らないけれども、兎に角日本が莫大な軍需資材をアメリカから買ひつゝある。若しそれがなければ、アメリカは疾くの首に中立法適用と出て居つたらうと思はれる。何分日本から莫大な注文を受取つて

居るから、その方面の運中が袖を引張る。だから今新に軍需資材供給に日本を窘めるやうな手を打とうとしても、今まで中立法の發動を阻害し來つたあの事情に變化がないかぎり、今すぐに中立法發動が實際問題化し難からう。又別種の壓迫手段として通商關係上日本をドイツと同じやうにブラック・リストに載せる、即ち互惠主義で米國が各國と結びつつある通商條約に對する日本の均霑を許るさないやうにするといふことも考へ得られるのであるが、斯うした最惠國待遇の剝奪は日米通商條約を廢棄せねば行はれない、然るに日米通商條約廢棄には六ヶ月の豫告を必要とする。半年後にならぬと効果を發生しない措置では當面の實際問題にはならない。つまり武力は勿論のこと、經濟方面からも此際あの抗議の趣意を實行し得る手法はアメリカは今持ち合せて居ない、さう云ふ譯で、實は私は此の米國抗議の件にあまり思念を傾けて考へたことがないのだ。

だが何故アメリカが此際アア云ふ抗議を改めて持ち出して來たか？

五

(イ) 第一は選挙対策

私が想像する所では、先づ第一に、本日（十一月八日）からアメリカで始まる中間選挙——之を控へての所謂選挙対策である。と云ふのは支那に居る商人や宣教師などから色々な陳情を頻々として持込んできて居る、云ふまでもなく選挙戦には有らぬ問題が利用されるから、政府は豫じめ先手を打って、それに付ては此の通り日本に對し嚴重に行つてると云ふ立場を作らねばならぬ。今度の抗議は、いつものよりは行文冗長で、しかも日本内地に於ける爲替管理令の運用にまで文句を着けて居るところを見ると、對内宣傳の氣味が多分に現はれて居るやうに感ぜられる。アメリカの公文の論旨は、此の席に居られる田村幸策君が中外商業で明晰に論駁されて居る、アレで盡きてゐる。

(ロ) ミュンヘン協定の影響

第二點として申すべきは、此のミュンヘン協定の米國人心に與へた影響である。即ちヒットラーに英佛がやられてから、世界——少くとも所謂民主主義諸國を風靡して居る思潮は、軍備絶對至上主義である。先般のチェッコ問題の、アノ最後の一幕以來、英國の労働黨すらも軍備絶對至上主義と云ふことに考を改めてしまった。アメリカでは、ルーズヴェルト現大統領が明後年の第三期大統領を狙ふや否やと云ふことは興味ある問題であるが、とにかく彼が一九三二年に大統領に就任した時の米國の經濟状態や社會状態は實に慘澹たるもので、社會的に破裂をも見兼ねまじき勢ひであつた。爾來色々といふ努力をして居るが、彼の就任當時、千二百萬乃至千三百萬と謂はれた失業者をドレだけ無くすることを得たかと云へば、何百億の金を使つて一時は四百萬人ばかりは無くしたのだが、それが再び元

戻つて来て、殊に今年になつてから失業者が非常に殖えた。アメリカ人はデイフレッション（不景氣）とは言はずして、リセッション（景氣後退）だと言つて居るが、どつちにしても、失業者がドンドン殖えて居る、
一体、ルーズヴェルトの經濟更生策たるニューディールが成功せぬ時には、日本はアメリカから非常な痛撃を喰ふかも知れぬ、少くとも大きな軍備で嚇されるぞ、國難に藉口して民心を外に轉ずると云ふことは、デモクラシーの國の政治家がよく行ふ手である」と云ふことは、私ガル氏就職當時から、ソウ云ふ場合があるやうに豫感し世上の識者に豫告もして居つたところであるが、今度は正にソウである。ミュンヘン協定で、歐洲再戦の危機は間一髪に免れたが、抑もチェッコ問題に付てのルーズヴェルトさんの活動は、我々の觀るところでは、格別有力の影響を及ぼしたらうとも想像出来ない、極めて抽象的、概念的な平和的解決勸告の電報を、第一回はドイツとチェッコの大統領に對して打ち、第二回にはヒットラーに對して

のみ打って「お前が平和解決の決心せよすれば平和になるのだ」と言つた、それだけのことであるが、英國議會に於ける討議の速記を見て居ると、チエムバレン首相の演説ではムツソリニにも敬意を表し、ダラダイエにも敬意を表し、就中「米國大統領の有力なる支援に依つて云々」と大に大敵を打つて居る。ソコでアメリカ人はいい氣分になつて、ルーズヴェルトの甲入の故に流石のヨーロッパの連中も齒を折られたのだと考へて居るらしい。之と同時に恰度先年のエチオピア問題に於けるラヴアル・ホア合作の解決案が弱國エチオピアを犠牲にしたものだとして米國で非常に不人氣であつたやうに、今度のミュンヘン協定も、アメリカ人は、民主主義の國がヒットラーの鐵拳に叩き付けられたのだ、無流血の大敗北をしたのだ、畢竟軍備が足らぬからだ、と、斯うアメリカの輿論は認めて居る。大統領側も盛んにさう宣傳して居る。鬼に角米人一般の感情としては如何にもヒットラーの成功が小憎くらしい。

そこでアメリカは此の機運に乗じて、海軍を更にくドえら
のにする、陸軍もドえらいものにする、大軍備を完成しな
らぬと、コウ云ふ風にホワイト・ハウス方面から頻に宣
傳して居るやうに見える。周知の如くアメリカの軍備は——殊に海軍及び空軍
の関する限りは、主として日本を對象として居るのだから
國內に對する軍備宣傳の角度からは此際どうしても日本に
一平打込んで置かなければならぬ。大軍備進行曲の一つの
碩大として日本を取つちめて置くことは必要なんです。御承知の通り今から數ヶ月前にはル
スヴェルトに對する國內の人氣は恒言不味であつて、或は
労働組合の内輪割れや、或は民主党内に於けるニュー
デイルを好まぬ連中と、ニューデイル絶對支持派との内紛、
或は地方のニューデイル派でない上院議員や代議士連を
落選させるべく大統領自身で地方に出掛けたり、色々行
つて居つたのであるが、ミュンヘン協定以來は、國難前
に迫れり、どうもドイツがブラジルあたりにも手を出し

かけた。大西洋に對するドイツのアグレッシヨンに備へなければならぬと云ふ宣傳をし、それに乗じて大統領の大軍擴進行曲の宣傳が非常な人氣を浴びつゝ居る。丁度一九三二年に初めて大統領に就任した當時の聲望と相等しい。今日ほゴルーズヴェルトの人氣の上がつて居ることはないとすら云はれ居る。英國あたりではソウ云ふ風に見てゐる。

世界大戰の時に軍需工業局長をして居ったバルーチと云ふ人が、
—— 獨伊は世界中のマーケットと資源を鷲の目鷹の目で探して居る。殊にドイツは南米の方にグン／＼とアグレッシヴに入つて行く
と云つて—— このブラジルのことは御承知の如く、ブラジル駐在のドイツ大使が歸朝して居つたのを、ブラジルの方でアノ大使を歸任さして呉れては困ると言ふたので、ドイツの方も、それではお前の所の大使もベルリンから歸らして呉れなければ困ると云ふので、互に大使を呼び還して氣まづいことになつて居るが、之は米國のユダ

ヤ分子の策動などがあるのではないか。證據はないけれども私はソ
ウ云ふ風に疑つて居る。此のバルーチといふ人もユダヤ系米人中の
有力者なんです——とにかくディクテーター・シツプ・ファツシヨ
國、全体主義國と云ふものが、アメリカから言へば、嫌な奴に相違
ない。今までは腕ッ節で實際に叩き付けなければならぬ相手は太平
洋の西にある日本だけだと云ふ膳立になつて居つたところ、大西洋
の方から、ドイツも来るぞ、イタリも来るぞ、中々油断ならぬ。
コウ云ふ風な宣傳の結果、今や國を擧げて大軍備に向つて狂奔しつ
つある。この大軍備進行曲の伴奏として十月六日の對日公文が役立
たせられて居るのではないかと想像する。

(ハ) 前年のシカゴ演説敷衍

それからまた昨年の十月五日にルースヴェルト大統領が、御承知

のシカゴ演説に於て「侵略戦は傳染病の如きものだ、コウ云ふ病氣が他に傳染してはならぬから、侵略國は宜しく之を検査所に隔離すべきだ」と、主として支那事変に於ける日本を指しての糾弾演説を行った。その翌六日には國務卿ハルがステートメントを發表して、「國際聯盟に於ては支那の提訴を採り上げて、日本が行つて居ることは、九國條約違反、不戰條約違反、聯盟違反として聯盟が扱ふやうになつたといふ報告を、スミスに居る米國公使から受取つたが、米國政府も今次の支那に於ける日本の行動は、九國條約違反、不戰條約違反である」と認める」といふことを公表して居る。現在は丁度その一周年に當たる。向ふの人達は、輿論に訴へる重大宣傳にはコウした一種の聯想を伴ふ。取りの點にも餘程重きを措く。ソウ云ふ偶然の廻り合せもあつて、タイムと云ふ角度から十月六日を選んだ。即ち昨年のシカゴ演説及び之が補説の國務卿ステートメントの趣旨を、その一年の日に更に敷衍し擴大して宣傳的効果を期したものと見られる。

(三) 懐中電氣式外交の愚

一体なぜ私がアメリカのことを斯う執拗に話すかと云へば、私のやうな世間に餘り交渉の無い人間は、世間の事は判らぬ立場に居る譯であるが、併し必ずしも判らぬことではない。相當に判る。その私から觀ると、現在日本の國政の動きに勢力を有する或る方面に於て、どうも——一つ英米間に楔を打つて、アメリカを抱込もう、今後の外交は曰米親善で行かう。さうして滿洲や北支にアメリカの資本をウソと入れる——といふ考があると云はれて居る。必ずしも齋東野人の語とも見做されぬやうである。しかしコウした考へ方は、誠に以て無邪氣三種と申すよりは、實は危険千萬なる御考へである。恰も燈火管制下の道路を懐中電燈をたよりに歩るいてる人のようなもので自分の足許だけは辛うじて見えるのかも知れぬが、道路がドンナ格好をして居るやら、ドンナ着が此方を向いて来るやら、サツパ

り判らず、否判らうとしない行き方である。之を私は懷中電氣式外交と謂ふ。或は一名片想ひ外交とも謂ふ。一体喧嘩と戀まふには對手がある。この女と夫婦になると自分一人で決め込んでゐても、向ふが眞平御免と来ては恥掻きにする。喧嘩も亦然りで、如何に此方が喧嘩したくなくても、向ふから喧嘩を賣つて来れば仕方がない。懷中電氣式外交は斯うした判り切つた道理を忘れて、この十年來實は眞に繰返されて居る。米國抱込と云ふやうなお芽出度いことを懷中電氣式に考へて、若しも之が國政に影響を及ぼした場合には、とんでもないことになる。所が、いつも日本には天祐がある。ソウ云ふ愚劣な考が勢力を擡げようとする、チヤンとアメリカの方から、十日六日のあの公文だ。流石の片想ひ先生達も之で夢が醒めたらう。皇祖皇宗の御神徳の忝けなきを感仰する次第である。

(ホ) 米國の極東對策と現認識

實は私は、アメリカが如何に日米関係を觀て居るかと言ふことを、
滿洲事變以來アメリカの政府、大統領、セネター、或は國務長官等
の公式非公式の言論乃至此の日本外交協會に該當する、而して失禮
ながらモツト大きな存在を有する米國のカウンシル・オン・フォー
レン・リレーションズあたりから出て居る刊行物等を摘譯して、
アメリカから觀た日米關係^レビでも題する書物にして、我邦の片想
外交病者を一ツ教育してやる必要があると思つて私かに腹案を作り
かけて居たのだが、今次の米國公文で一先づソウした勞を省かれた
形である。去りながら茲で極く摘要的に片想ひ先生達を教育して置
きたいことは、米人の所謂門戶開放主義、即ち米國の極東政策なる
ものが米國の國策及び米人の政治意識にドウ云ふ地位を持つて居る
かと云ふことを先づ認識して貰ひたい。此のことに就ては私は、先
年濱口内閣當時のロンドン會議の際に、講演もし本にも書いたので
あるが、言ふまでもなく米國の二大國策はモンロー主義と支那の門

戸開放だ、而して國策とは何ぞやと云へば、要すれば武力を以てし
ても徹底を期する所の政策であり、合衆國の場合に於てはモンロー
主義と支那の門戶開放が、之れだとせられて居る。米國は何が故
に、世界無敵の大海軍、世界第一位の海軍を要するかと云へば、此
の國策維持の爲だ、就中、極東の門戶開放の爲だ。此の極東の門戶
開放、即ち支那問題に對する米國の欲求はヨーロッパ問題よりは餘
程積極的なのである。ヨーロッパ問題に付ては、最近數年來殆んど
絶對性を以てアメリカ國民を支配して居る指導原理は、「ヨーロッパ
の紛争に關係しては不可、ヨーロッパで如何なる事があらうとも、
米國は道徳的インフルエンスを及ぼす以上に之に係り合つちやなら
ない」といふにある。ヨーロッパ問題の爲に武力を以て云々すると云
ふことは今日のアメリカ人の心持では絶對に嫌なのである。だから
若しハル氏やルーズヴェルトさんに任せて置けば、エチオピア問題
でも、或は又チエツコ問題でもモウ少し積極的に出たかも知れぬが、

前述のアメリカ國民の心持が之を牽制して居るのである。カウンシル・オン・フォーレン・リレーションスあたりから出た書きものを見ても、モンロー主義に関しては受身^{パスシブ}之に反して支那問題に付ては積極的^{アグ्रेसイブ}。合衆國大海軍も無論日本を目標——オブリジェクティブとして的大海軍だ——とチャンとソウ書いてある。此の事を忘れてはならぬ。尤もアメリカは對支投資額が僅に二億六千萬ドル位ぢやないか——一億九千何百萬ドルといふ數字すらある。——日本の對支投資額の何分の一にも値ひせぬもの、爲めに日本と戦争すると假定すると……海軍の高橋大將や八角中將を前に置いて、之は私が言ふのではない。アメリカ人が言ふのであるが……「日本と戦争すると假定すれば、五・五・三の比率を持って行つても、渡洋作戰即ち西太平洋に出掛けて行つて日本を叩くものだから、行つた時には、三の勢力たる日本の海軍よりもマダ弱いものにすらなつてしまふから、中々容易なことぢやない。費用も餘計に掛かる。だから宜い加減に

して置いた方が宜い」と。コウ云ふ議論も近年は米國の識者層に現はれて来て居る。曰本で比率撤廢とか、滿洲問題とか、聯盟脱退等の主張が段々勢力を得て来て、曰本が自主的外交をグンぐン發揮し始めてから、アメリカの識者も餘程反省的に考へるやうになつた。私の讀んだ四五冊の代表的著作を見ると、どうも今やつて居る大海軍で極東の門戸開放主義を徹底せせると云ふ政策はアメリカを何處に持つて行くだらうか？ 曰本を叩いて見たところ、曰本は事實外に膨脹出来ねば内から爆裂せざるを得ない現状にある。*Japan* must expand or explode 年に百萬づつも殖える。この大人口を抱へておとなしく引込んで居ると言つても無理だ。それは曰本民族に自滅を命ずるやうなものだ。此の曰本の亞細亞大陸進出を武力で叩きつけて見たところ、あの獨逸があれ程叩き付けられても十五六年経つか経たないのにあの通り更生したのと同じで、成程曰本を叩くとすれば米國は戦では結局勝つだらうけれども七八年もすれば又

一九

又曰本がメキくと大陸進展に頭を擡ちあげて来るに決ま^二つて居る。實に困つたものぞ——と云ふ風^一に論じて居る。斯の如く米國識者層の一角では日本に對する考へ方は相當理性的になつて來て居るけれど、さうした考へ方はまだ政治家殊に國防當局の頭を何等支配してゐない。あのマハン提督の教訓に淵源する大海軍建設の指導原理としての極東門戸開放主義に對する支配階級、就中國防當局の執着はまだく一九一六年のダニエル海軍法當時の頭でズット來て居るばかりか、東洋に於ける事態の發展は彼等の執着を益々強化せしむるのみである。だから今のところアメリカの御機嫌を直して頂くのは、日本は「先づ改めて五・三海軍に服従するのみならず、滿洲國は之を取消し、支那事變以來の既成事態も勿論之を取消し、英米の權益に對して彼等の言ふがまゝに損害賠償をなすは勿論、支那にもウンと賠償を拂ふどころか或は又歐洲戦争の終末に軍國主義下の獨逸の相手には講和をしないと云つて、ドイツに革命を行^レらした如く

彼等から見て「之ならば安心だ」といふ政治組織換言すれば彼等の所謂デモクラシイ的革新まで注文通りに恭順するの覺悟をすら要するるので、ソソ本ことは逆もお話にもならぬ。

(へ) よくない米國の對日意識

「アメリカは支那事変及び支那問題に付ては國際聯盟と提携して行^ハる」と云ふことはチャソと初めから國務長官が聲明して居る。時局變轉のテムポが餘りに急速だから、我々のやうな者でも動もすれはコウした重大の聲明をウソカリ忘れることがあるが、日本の偉い人や喧しく言ふ人達には、あのハル長官の聲明を想起して貰ひたい。一體今度の支那事変に「英國は中立だ、アメリカも中立だ」などと考へて居るのは困つたことです。中立ぢやない。支那の與國である之を法理的に論ずると、不戰條約とか國際聯盟規約の建前より云へ

は、……甲國が乙國に對して侵略戦争を行つて居ると、不戰條約や國際聯盟規約を執行する責任を持つて居る機關が正當の手續形式を経て認定してしまへば、中立國など云ふものがある譯がない。それをハツキリ言つたのは故濱口雄幸君だ、濱口君は首相在職當時例のロンドン條約辯護の演説中「不戰條約の今日、中立と云ふことはない。此の條約を無視して戦争をするものは世界全体を敵とするのだから」と言つたことがある。之をイギリスの或る政治雜誌では「流石は日本の總理大臣だ、大いに徹底して居る」と非常に褒めて居つたが、今次の支那事變では英米は正に其頭をやつて居るのだ、昨秋のブルッセル會議の議決は明かに參加各國に向つて、支那の對日抵抗力支援の義務を負はして居る。唯だ其援助の實施を參加國各自の裁量に一任してあるまでだ、斯うした九國會議の決議の原動力であるイギリスやアメリカに對し、所謂ゼスチユア外交で先方の態度を改めて貰ふことは望んで得べからざる空想である。唯だ實物教育で

以て漸次に向ふを覺りせる以外に手の下しようがない。

いづれにしても、假に今度のアメリカの抗議が無くとも、日米の關係は、少なくとも滿洲事變のステイムソン・ドクトリン以來、向ふの立場及び極東に於ける事態の發展の故に遺憾ながら段々と深刻化しつつある、此の状態が續く限りは、國民使節を幾ら遣らうが、どんな立派な人が行つて演説しようが、それは個人的の成功或は其の場の空氣が一時的に和かにはなるといふやうなことがあるか、も知れぬが、國と國との對立關係には豪も本質的影響がない。御承知のイーデンが英伊協約問題でチエムバレン首相と意見の衝突を來し、尚ほ「一般的にも首相とは外交觀念が違ふから」と辭職した。その辭職の理由を議會に説明した演説の中に、「政治家として又外交家として平和を追求すると云ふことは誰しも皆同じだ、併しながら其の平和なるものは、對手國との、相互的坦懷^{フリンクネス}及び相互の尊敬^{ミューチュアルレスペクト}に

基礎づけられなければならぬ。然るに「今、協商に應じなければ對
手にしませぬぞ」ナウ・オア・ネグアーといふ嚇しの下に交渉を開
くと云ふが如くでは、親善も接近もあつたものでない。首相の謂ふ
所の伊國との親善協商を此際行らうと云ふことに自分が賛成出來な
い理由はソコにあるのだ。「今行らなければイタリイは考へるぞ」
と云ふことは、相互的敬意を有つた着の言ふ言葉ではない。と喝破
して居る。洵に至言である。所が實は此のイーダン先生などは、曰
本に向つては年が年中「ナウ・オア・ネグアー」でやって來て居る。
コウした英國の高壓的態度に對し、私共のやうに「帝國は宜しくミ
ューチニアル・レスパクトの元則に立脚して對等の權式、互角の氣
合で應酬すべし」と言ふと、「あゝ云ふ本多達の意見は國交上不穩
當だ否危険だ」とさへ随分物の道理をお心得になつて居らるべき筈
のお偉いお方々が仰しゃつて居らっしゃるさうだが洵に困つたもの
である、さうかと思へば一方には随分行過ぎた事を行つて居りなが

ら、「コレ」の事業の遂行には是非ともアメリカの金を入れなければならぬから一ツアメリカ抱込みの外交をやらうかやないか」と云ふ意見もあるさうだが、向ふは此方に抱込まれるどころか、コチラを叩きつける積りでグン／＼大軍旗を進めて居る。コウ云ふ實勢なのだから、十月六日の米國のあの公文は、懐中電氣者流には近頃以て好い教育になつたと思ふ。(笑聲起る)之は冗談ぢやない、誠に我が皇國が天佑に恵まれて居る證據だと思ふ。

アメリカの公文云々の問題は之くらゐにして置きます。

二、英國の苦境

(イ) 「英國に非違なし」論者

ソレよりも今日は一ツイギリスのことを述べたい。今日は實は

二五

英米佛獨伊等が本質的にドウ云ふ立場に居るかト云ふことを、簡單ながら一通りお話ししたいと云ふよりは、マア私が學校にでも行つてソウ云ふ講釋をして居るのを諸君が隣の室でお聴きになつて居る積りに願ひたい。アメリカのことは今述べた程度に止めておいて、イギリスです。

英國憲政上の慣用語にザ・キング・キャン・ドゥー・ノー・ロング（國王に非違があり得ない）といふ言葉があるが、どうも日本の支配階級の人達の間にはブリテン・キャン・ドゥー・ノー・ロングの思想がある。之は可笑しな話で、一体いつ日本が英國の屬國になつたか、私は先頃聊か顔馴染のある某代議士から「自分共の仲間……實業家出身の故老代議士十人ばかりで、時局に関し御話を伺ひたいから」と頼まれた。之は面白いと思つて行つた。行つて色々話したが――結局、今次の事變は、將小石ばかりを追廻して居つたのでは收まらぬ。所謂樹を見て森を見ざるテツ造り口たるを免れぬ。廣東

を早く罨^やらぬと不可^{いかぬ}。蔣介石の長期抵抗力の源、水で云へば水源、それは香港だ。だから廣東を攻略すると云ふことは、或る意味に於てはイギリスに向つて「あなたの方は斯うなれば實力に訴へてまで蔣介石援助の方針を徹底されるお考であらうか？」と、將棋で云へば「お手の駒は何ですか」と英國を詰める所以だから、即ち長期抵抗の力源を抑へる所以である、どうしても廣東をやらぬと不可ぬ—と言つた。ソウすると、その實業家のメンバーでなく、しかし學位も持つて居り相當世間に名を知られて居る或る前代議員が、あとで私に喰つて掛つた。「本多さんが廣東を行^やれと仰しやるが、廣東を行^やつたら英國は黙つてゐますまい」。それはドウ云ふことですか。イギリスは武力で邪魔立てをすると云ふのですか。「無論ソウです」。ソレならば私は保證する。断じてソウいふことはない。ソシナカはイギリスは持つてゐない。ソシナカがあるならばチエムパレンセン自身^ニがヒットラーの山莊まで飛んで行きはせぬ。自分の足許のヨ

ヨーロッパの重大問題に之へ實力を背景としての自信がないのだ。尤もソレは今日に初まったことではないが、この點ならば私が保證する。此の事に付ては私は外務省は勿論のこと、少なくとも參謀本部が知つて居る程度のこととは調べてある積りだ。だから責任を負つて保證する。御安心なさい」と私が言うと、今度コウ来た、「廣東あたりまで戦線を横げれば日本は國力を段々消耗する。あなたはソウ云ふことは國家の爲に希望すべきことだとお考へですか。斯くの如く國力を消費することは國の爲にならぬと云ふことをお考へにならぬか」と。之には流石に、私を頼んだ主人側の連中も驚いて「本多先生に頼んでお話を伺つて居るのに、議論はよさうぢやないか」と注意した。之はアノ党派の所に來て本多が外交上の意見を述べると云ふので、或る有力な方面で非常に不快を感じて、特に其の人を寄越して何か邪魔をしようと思ふ考があつたと信すべき情報を實は私は其の數日前から有つて居つたのです。兎に角中央で拒當名前も知

れて居る人から今申したやうな名論で喰つてかゝられて私もチト驚いたが、廣東攻略論については此の席にも建川將軍のやうに我々と一緒に昨年末以來熱心に行つた同志が居るが——廣東攻略論などを唱へる者は國賊だ、けしからぬから爾次つて行れ、併し下手な者を遣ると逆に揆ぢ伏せられるから、アノ法學博士ならば大丈夫だ——と云ふので奇越したのかも知れないが、私はアノ人と取つ組むほど自分が偉いとは信じなかつたから、「おなたとは別の日にユツクリ意見を交換しませうよ」と言つて御免を蒙つたが、彼氏の背後の勢力は相當恐ろしいものゝやうに聞いて居る。

(ロ) チェッコ問題に現はれた英國の態度

英國と云ふものは今ドウ云ふ立場に居るか、それを明らかにするのには、先般のミュンヘン・セツトウルメント、あのドイツとの始末

はイギリスに何を教へたか。 *What lesson did it teach Britain?* 此
の事なのである。有体に云へばあのチエッコ問題急潮化の當時、私
は今度は恐らく戦争になると思つた。「英佛が、民族とし國家とし
ての名譽を棄てない限りは戦争にならざるを得ない。チエッコのベ
ネシユ大統領は、私は彼が大戦中祖國復興に奔走して居る時代に聊
か世話をしてやったことがあり、個人的にも彼の長短共に知つて居
るが、ベネシユの立場から云へば、潔よく亡國の英雄となることを
行るのが一番得であるし、チエッコが断然ブツ衝かつてしまひさへ
すれば、英佛は否でも應でも、成敗如何に拘らずチエッコと共に起
たざるを得ない。乃ちベネシユは英佛をして餘儀なく手を出さしむ
るであらう。諸般の情勢を按じ又英佛の執つて居る準備などから云
つても、結局は戦争にならざるを得ない」と斯う思つた。所が
アア云ふ始末となつた。其後來を新聞雜誌などから觀れば、成程自
分の研究が足らなかつたことを發見する。

尤も、チエッコは没身に立つての戦をする決心で、軍は命令一下直ちにドイツ軍の侵入を防ぐ積りで居ったところ、テッシェン方面に二個師團ばかりのポーランド軍が出て来たので、腹背に敵を殺けることゝなつたのみならず、ポーランドが来るやうなことで、フランスが、ポーランドをドイツ側に追いやつてまでチエッコ援護と来る譯がない、フランスとチエッコの同盟條約は一片の空文化する、チエッコは孤立無援一敗國を減ぼすの戦をやる外はないといふので、茲に屈服と決心したといふのである。それはチエッコの方の事情だとして、叔英師の方はどうした譯か、事件落着後の英國政府當路の説明やら議會の言論やらを見ると、全く武力に於て足らなかつた。イギリスも九月二十五六日頃の模様では成行次第では一戦亦己むを得ずとするものゝ如く、ロンドンに於ける防空施設などは數日間にエライものを行つた。フランスも、泣の涙かも知らぬが苦虫を潰したやうな顔をして各人が入營なり徴用なりに應召したのであつた、

ところがその間にフランスが逃げ出す、パウンドが逃げ出す。實に嫌な
戦争だといふのが一般の心持ちだ。ドイツも人民はソウらしかつた。
所が今日は空軍の世の中である、一應戦争の見越して準備にかつ
て見ると何分今日の英佛の空軍の實勢力では、いざと云ふ時にドウ
してもドイツに向つて双向へない實情がマザくと分明つて来た。
しかしヒットラーが戦争を賭してまで今度は行る積りかどうか、チ
エムバレンが二度目の會見で、——君が十月一日には是非ともジュデー
レン・ランドに兵を入れるとあれば、フランスはチェッコとの同盟、
條約に依つて否でも應でも起さなければならぬ。フランスが起て
ば、我輩の方も起つし、ソヴィエットも起つ——と云つて脈を引い
て見ると、ヒットラー曰く——ジュデーレン・ドイツ人を助けて民
族自決をやらせるためには世界戦争を賭するも亦已むを得ずと決心
して居る——それは大變だ。ソレならば我輩は閣僚と又相談しなけ
れば、コゝでは返事が出来ない——と急いでロンドンに歸つて来た。

チエムバレンは議會で「若し我輩が行かなかつたならば必定戦争となつて居つたらう」と言つて居る。ドイツは本當に行らうらしい。向ふが行るとなれば、此方は行れない。ソレはどう云ふ譯かと云へば、ドイツとの戦争の場合には、差當り陸軍はフランス任せで、英國はあの大海軍で封鎖をするだけで宜さうなものであると一應考へられるのであるが成程海軍での封鎖は獨逸に取りての若手には相違ないけれども、海上封鎖の苦痛が獨逸に効果を生ずるまでには半年や或は一年もかかるのに反しドイツの空軍の英國制壓は開戦の劈頭から事實化する。英獨空軍勢力のあの懸隔を以てすればロンドン其他英國の重要都市は開戦と同時に獨逸空軍の猛撃を受けることは先づ當然の歸結である。英國は夫の所謂十五億磅軍横計畫の一項として一九四〇年までに第一線機一七五〇臺を目標で空軍の整備に着手したがドイツ空軍の勢力の偉大性が段々判つて來てから今の計畫では一九四〇年に四千臺の第一線機を本國に備へることになつて居る。

ところがドイツの空軍は一九三九年には第一線機が六千臺に達する。或は八千臺とも謂はれて居る。だから一九四〇年に漸く四千臺を將へる英國では逆もドイツと相撲にはならぬ。今日はドイツの半分ぐらゐしかない。その英國が、歐洲大戦の時はタイム・イズ・オン・アワー・サイド「時は我方の味方だ」で行つたが、今度はソウは往かぬ、第一發で、したたか空軍にやられる。今擧げた數字は、ロド・ロシアンが數月前に、國民登録法の必要を説いた演説の中にあつたのだが、尙ロシアン侯は或る高級政治雜誌での論文で「空軍兵力即ち飛行機の數に於ても、航空機製造能力に於ても、將又防空設備に於ても、この三者いづれに於ても英國はドイツの半分の力しかない。又フランスはドイツの三分の一ぐらゐだ」と云つて居る。斯う云ふ譯だからヒットラーが「否でも應でも行る」と肚を極めてかゝつて居る以上チエムバレンセン、考へざるを得ない。だから今度は全く武力の前に屈服したのである。チエムバレンセンソウは剥き

出しに云はず和協と再軍備の並行など、巧妙な表現で英國國策の進路を説いて居るが、要するにドイツ空軍の前に英佛が屈服したのであることは掩ふに由なき正確の事實である。

(ハ) ドイツに屈服後の英國の朝野

その屈服の結果はドウなつたか。チエムバレンがロンドンに歸つて来た時には、デイスレリーが、一八七八年のベルリン會議から歸つた時以上の持て方であつた。あゝのときデイスレリーは「予は平和と名譽を齎して歸つた」と揚言したのは有名な史實であるが、チエムバレンは、ミュンヘン四國會議からロンドンの飛行場に歸つて來ると、敕使が來て居って皇帝の御手紙がある。その御手紙は、察するに——すぐ御所に來い、親しく卿の報告も聽きたい——と云ふのであつたらう。飛行場から御所に行く迄の間は大変な歡迎の群集で自

動車は迎も進めない。やがて御所のバルコニーに、チエムバレン夫
妻を真中にして皇帝と皇后が左右に立って群集の歡呼に應へた。曰
本などでは考も着かぬことである。群集はチエムバレンに對して
「ヒー・イズ・ジョリ・グッドフェロー」を謳ひ、それから彼が官
邸に歸つて見れば官邸は宛然花の林になつて居る。チエムバレンは
全く救世の神様になつた。之はイギリスばかりではない。フランス
でも大騒ぎで、チエムバレンの爲に、グエルサイユの何とか云ふ通
りをアヴェニユー・ネグイル・チエムバレンと改めた。ベルギーも
アメリカも同様です。そこでチエムバレンさんも「我輩は名譽と平
和を齎して歸つた。ピース・イン・アワー・ライフタイム、我々の
眼の黒い間は平和だ」と聲言もしたし、其時は労働党の者でさへ、
又保守党の長老でハケ間シ屋のチャーチルあたりでも欣然としてお祝を言
つた。

けれども私は、其當時、やがて一週間も経つと反對論が擡頭する

ぞと訪客に言つて居つたのであるが、果せる哉、やれく助かつた、先づ戦争なしに済んだ、ソソならは茲で一つ外交攻撃で行つてやれと云ふのは政客の人情でもある、首相の「ピース・イン・アワー・タイム」と云ふことは一体ドウ云ふ意味なのか？ 米國あたりの輿論を見ても、來春まで戦争が延びたと云ふだけではないか、之で我々が眼の黒い間は平和だと云ふことにドウしてなる、ヒットラーが頑張つたから譲つたのぢやないか、一体しまひには何を讀る積りか、この次には「植民地を」と來るだらう、之も讀る、その次には何だ？——と、えらい攻撃である、所がチエムバレン曰く「拙者の年輩（日本流に云へばセナー歳）と拙者の立場になつて考へて御覽なさい。あの場合、拙者のイエスカノーが孰れかの一言で幾百億生靈の死活が決まるのだ、拙者がノーと言へば幾百萬の人間は死地に陥いることとなる、拙者の年輩と地位ではソウ云ふことは出来兼ねる、成程今となつて考へればピース・イン・アワー・ライフタイムと言つ

たのは少し言ひ過ぎかも知れぬ。併し歸つた時にアア歓迎されては、拙者も人間だから、少しは言ひ過ぎもあらうぢやないか。現にダウニング・ストゥリーオーの總理大臣官邸宛で自分の所に來た手紙の數が二萬餘の多きに達してゐる。自分は其の中のホンの一部しか眼を通さぬ、乃至報告を受けないが、その何れもが、是非平和の解決をと云ふことであつた。だから拙者としては茲で取消したり修正すべき言葉もなければ、何等遺憾とする點もない」と述べ、それから「要するに我々は西歐四大國間の和協をグン／＼進めなくぢやならないと同時に、更に一段も二段も軍備の擴大強化を行らねばならぬ。此の兩者は決して矛盾するものぢやない。國防の弱い所に強い外交は出来ない。ウィーク・デイ・ロマシーはウィーク・デフェンスの産物である」と喝破して居る。此の最後の一節と同じ意味を日本で此の二十年來終始一貫して唱へて居るのは先づ此の本多位のものだ。私は年來「實際關係で物を言ふのは金ぢやない武力だ。金が物を言

ふならば、ベルギーやスオースやオランダはドイツ、オーストリア、日本
なんどより大なる勢力と權威を國際政治に揮つて居る筈だ。富國強
兵は國としての理想であるが、もし此の二つを併せ得ること能は
ずとせば、貧國強兵亦已むを得ない。富國弱兵は一番いけない。フ
ランス、英國が其の例であると言つて居る。チエムバレン首相の
喝破して居るのはソコゝの點なのだ。

(三) 軍備擴張に一致した英政界各派

之はチエムバレンだけではない。イーデンなどもソウである。今
朝出掛けに入つたタイムスをチヨット見ると、最近イーデンがロンドンの或
宴席で爲した演説に、「獨伊は彼等に特有なる經濟組織の結果、我
々デモクラシーの國の經濟組織では爲し得ざる高速度の軍備充實を
やり得たのだ。だから我々も大至急に軍備充實を實現せむがために

は、國內の經濟組織も亦ドイツ・イタリ一流に若干の修正を加へること亦或は已むを得ざる數と思惟せなければならぬ。今日は舉國一致と廣く各派の適材を網羅せる内閣を造つて之に當らなければ不可^{いかに}と云うて居る。コウ云ふと參謀本部あたりの若手の提燈を持つやうであるが、それが實は英國が今度の歐洲危機で得た教訓である。又イデンの他の場合の演説によると、「數年來、獨伊の軍備は勿論、英佛も此の通り大軍擴を行つて居るのであるが、併し我々のは平和時代に於ける軍備擴充、即ち今は平和の時代だけれども萬一に備へる爲にと云ふ頭で行つて居る軍備充實だ。然るに獨伊の方は、今は戰時なりといふ頭で戰時の施設として行つて居る。我々が獨伊に對して非常に立遅れたのは此の頭の置き所が違ふからだ。だから我々も亦、非常時也、戰時也といふ頭で軍備の高速度的充實をやることにしなければ不可^{いかに}」と言つて居る。ウインストン・チャーチルは傳統の軍備主義者であり帝國主義であつて、之は別ですが、一体イ

デンあたりは、保守党内の所謂進歩的分子、即ちリベリストで、外交思想も實は労働党と大差ないのである。此の先生が、今言ったやうに——已むなくはドイツ・イタリ一流の統制經濟、計畫經濟に依つて軍備を早く充實しなくちゃ不可——と云ふやうになつて居る。この點になると、ロシアン侯爵は非常な見識のある人だと思ふ。チエツコ問題の持上がる以前に既に、先程言つたやうなドイツ空軍との比較をして、「この空軍の一點から言つても、國家が適當と思ふ國民登録法（ドイツ・レジストレーション）に依つて國民の能力を徵用するやうにしなればならぬ、一朝有事の場合、前回の戦争のやうに慌てゝ國民登録法を施行し、それから徴兵法を施行すると云ふやうなことは大變だ」と警告して居る。がミュンヘン會議から歸來後のチエムバレン首相の演説にも「今次の危機に際し呈露せられたる國防の缺陷に對しては嚴重なる査閲を加へ以て、之が補正に努めることとする」とある。サー・ジョン・サイモンなどはモットえらい言葉で以て同じ意味のことを言

四二
つて居る。要するに英國は、日本流に云へば國家總動員法を施行して、大至急に獨桿の軍備に追付く、それには第一に空軍の擴充を行らうと一生懸命なのである。佛國亦然り、歐洲の此の風潮が又アメリカを襲ひ、殊に不景氣退治の對内政策上、丁度好い題目でもあるところから、ルーズヴェルトさん大に之を利用して國論を大々的軍備擴張の方に煽つて、其の效果はグン／＼と表面化しつゝある。今や鐵道の賃銀問題に原因する勞働爭議だとか、勞働組合に於けるグリーン一派とルース一派との傳統的争ひだとか、民主党内に於けるユードイル派と保守派の争ひだとか、コウ云ふ風な國內の紛紜は悉くミュンヘン會議の教訓で解消し、今や米國は大統領指導の下に舉國一致、大軍備に邁進せんとして居り、大統領の聲威今日ほど盛なるはなしと云ふ状況である。

三 佛蘭西の顛落

何と云つても今度の事件で一番ひどい現實暴露を行つたのはフランスである。周知の如くフランスはヴェルサイユ會議に於てライオンランドのドイツからの切離しを主張し、英米の反對によつて之を撤回して、その代りに貰つたものが「排發なくしてドイツより侵略戦を受けられる場合、英米は陸海空の全力を擧げてフランスを助けに行ふ」と云ふ援助條約であつた。併し之が米國のヴェルサイユ條約批准拒否の結果消滅すると、イギリスの援助條約も、米佛間の條約發效を條件として居つたから、自然に消滅となつた。

茲に於てフランスは、ミルランとかポアンカレとか云ふやうな剛邁雄偉な大政治家の指導下にベルギー、ポーランド、それにチエッコ、ルマニヤ、ユーゴスラヴィヤの小協同三國の——此の五國を聯ぬるドイツの包圍網を造つて、之に依つてドイツを押へて居つたのだが、ヒットラーの獨逸となり、軍國獨逸の復活が着々實現し出して来ると、フランスとしては此の包圍網だけでは心細くなつた。殊

にヒットラーの畫策が圖に描ってホーランドがドイツとアア云々關係になつて、謂はばフランスといふ御序主に反いてドイツといふ情夫を奪へたやうな恰好になつたり、白耳義もソロ／＼元の中立國テフ立場に滞つたげに、ドウもそわ／＼した態度になつて来た。是に於て半ソヴイエットのあの大武力がフランスに取つて大に魅力を持つやうになつて、遂に一九三四年の佛蘇同盟となつた。斯の斯くフランスが白國の安全保障として意匠修繕多大の苦心と犠牲を拂つて築き上げた同盟機構はヒットラー獨逸のパワアー・ポリティック武力政策のために着々袂を打ち込まれつゝあつた。そのヒットラー獨逸の大武力が今回のチエッコ問題で效果觀面に現はれた結果はどうか？と云へば、フランスの同盟機構の最も大切な骨幹となつて居つたチエッコが一の獨立國家としても己に全く瓦壞に歸し、ミュンヘン協定以後のチエッコは完全にドイツの屬國となつたと同然である。國際政局の一要因として然るのみならず内政方面に於ても、共產黨を築

止してこの思ひ切った大轉回をなし、又ユダヤ人に對しては、差別待遇どころではない、國民生活の各分野からグン／＼猶太人排斥を實行して居る。ベネシユはチエツコを去るに臨んで「自分が居ることとは、新しいチエツコが隣邦と親善關係を保つて行く上の妨害となるから自分はチエツコを去る」と言つたが、それは今度の危機ではチエツコはフランスと英國に賣られた譯だ、チエツコとしては最早やドイツと親善シ其の好意に依存して行くより他に採るべきコースがない。との意味を語つて居るのだ。誠に其通りで、經濟上の角度から觀てもアア三方から圍まれてはドウにも出来ない。斯の如く既に十五六年來歐洲政局に於ける佛國の權威の礎石であり否内容そのものであつた佛蘭西系同盟體制が全然土崩瓦壞した結果、フランスとしては今や絶対に英國にクツ附いて行く以外に行き方がない。英國との關係のみがフランスの唯一の恃みである。故にフランスは、今や二等國は愚のこゝと、三等國にまで落ちてしまつたと云つても間

ロヨ

違ひではない。最近ウインストン・チャーチルが米國に向つて行つた放送演説はすばらしい名文であるが、「歐洲に於ける同盟組織が全部崩壊した」と言明して居る。彼は議會の演説でも之を言つて居る。

歐洲政局に於けるフランスの地位顛落が英國にドウ云ふ影響を與へるか？元來夫のロカルノ條約に於ける英佛の關係、或は謂ふ所の英佛アンタントなるものは、本來フランスだけがイギリスの厄ひになつて居るので、英國はフランスに對してはアンタントを許さうと拒まうと自由な立場にあるものなるかの如き迷信を、イギリス人の多數が持つて居る。曰本人でも、英國で暢氣（暢氣）に暮らして來て居る新しい連中は大抵そんな風に考へて居るやうだ。所がソウぢやない、夫のウインストン・チャーチルは、今春の獨逸併合のアノ騒ぎの際に議會で二度ほど、誠に痛切な大演説をして居る。「フランスが其安全保障上英國との提携連絡を要すると同じ程度に、英國もフラン

スとの提携連絡を要するのだぞ。今日は英佛海峡は英國に取つての防禦線にならぬぞ。若し我等の味方としてのフランスの陸軍と空軍がなかつたら、英國は國民の一番嫌ひな徴兵制度をさへ實施するの要あるのだ」と、英人の一番ピンと来る所を衝いて居る。要するにフランスとアア云ふ關係があるから、嫌な徴兵制度もなしにドウにか行けて居るのであつて、歐洲に於ける英國の安全保障はフランスとのアンタントに依存して居る。そのフランスが今や大變弱い國になつたのだから、ソレだけ歐洲に於ける英國の安全性のマーヅンがズット低くなつた譯である。即ちそれだけ英國が弱體化した譯である。そこで高速度に軍備の大擴張を行^ハらなければならぬし、國民登録法さへも實施しようとして居るのである。ソウ云ふ次第で、英國は國防上の脆弱性を痛感して居る。フランスが弱體化したと云ふことは英國が弱體化したと云ふことなんです。一言以て之を蔽へば、ヨーロッパ大陸は今やヒットラーの制壓下にある、ドイツが大陸霸

種を挫いてしまつたと云ふことは否むべからざる今日の現實である。従つて今日の英國に對して、東洋問題に付て實力云々を此方が恐れる必要は無論ない。この英國の立場をハッキリ認識して置くを要する。

四 伊太利と地中海の制覇

イタリイはどうかと云へば、イタリイとドイツとの關係は、五月にヒットラーがイタリイ訪問の際「ボヘミヤのドイツ人の問題に付ては、歐洲大戦にならざる程度に於て御勝手に御やりなさい、イタリイはドイツに道徳的、外交的、支持は與へませう」と、コウ云ふことにムツソリニイの諒解を得たと云ふのが當時世上に傳へられて居つた所である。蓋しオーストリーや、ハンガリーに對し従前存在して居つた獨伊間の摩擦、對立の關係が、エチオピア問題に於ける

獨逸の好意的態度によりて大体解消し、獨伊兩國は、歐洲に於ける各自の勢力範圍、國民的、民族的慾求の地理的分野の協定が出来たものなるべく、而してイタリ―は何處までドイツに譲つたかと云ふに、獨逸併合は勿論先般のチエツコ問題に於て伊太利の示した態度にてはカルパチヤ方面國境地帯に於けるポーランド及びハンガリーの國境をどう決めさせるかと云ふやうな點までも結局ドイツの意思通りに決まつたところを見ると、つまりダニエーグ方面ではイタリ―はドイツに譲る。イタリ―の民族的慾求の對象は、ダニエーグ方面よりは、地中海に在る。どうしても扱は地中海の霸權を指標として邁進する、此點につき獨逸の諒解を得て居るのだらう。地中海制覇を目指す伊太利として現に最も重きを置くのはスペイン問題である。而してスペイン問題は英國から見れば取りも直さず地中海問題である。その地中海問題が英伊間の蟻りである。

(イ) 地中海と英伊関係

地中海問題が賭りとは何ぞやと云へば、嘗てムツソリーニが「地中海はイギリスから云へば、東洋に於ける英國領地へ本國から行く幾筋かの通路の一つの近道に過ぎない」と言つたところが、イーデンは「ソウではない。英帝國の大動脈である」と言つた。併し我々が観れば、地中海はイタリーに取つては、呼吸器でもあれば、胃腸でもあるし、否、生命そのものである。「イタリーは地中海に於ける島だ」とムツソリーニが嘗て言つたが、その伊太利は東はスエズ、西はジブラルタルに此二つの出入口を英國に押へられて居る。いつ英國からギユツと締められるかも知れぬ。ソウするとイタリーは普通の貿易通商の自由まで無くなつてしまふ。殊に資源の無いイタリーが必要な資源を海路を通じてヨソから取ることすら英國の力で押へられてしまふ。コウした環境は伊太利の甘受し得る所ではない。

五〇

ところがイギリスから云へば、彼處に、強大なイタリーの空軍と、特異の能力を持つて居るイタリーの輕快なる海軍力が充實されて、ムッソリーニの如き經綸を有する者が之を使つた日には、英帝國の動脈は切られてしまふ。昨年一月の英伊デントウルマンス・アグタリメントに於て、地中海の通過及び出入の自由を相互に認め、イタリーはスペインに領土的慾求なく、バレアリック・アイランズにも領土的野心を持たぬと云ふことを明にし、更に改めて本年四月の英伊協定なるものを作つて地中海、紅海等に於ける相互の立場保障を約定した。此の地中海問題なるものは結局イタリーの方では武力解決より以外にないと信じて居る。のみならず、イギリスに對してはソナナに怖がつて居らぬ、……と云ふよりは、餘程軽く視て居るとすら見られる。英伊協定に依れば、スペインに對してイタリーは何等領土的慾求もなく領土の現状変更の意圖も持たぬとあるけれども、只でアア働く譯がない。雄大な空軍陸軍を送つて二年近くも行

五二
つて居る。ソウした立場と行懸りをイタリイがスペインに持つて居る以上、アレだけの世話を受けてるフランコ將軍として、平時は兎も角も、戦時に、バレアリック島の何處かを飛行機や潜水艦の根據地位に使用する位のごとは伊太利に容認するだらうことは當然の成行である。それが又英國に取っては心配の種なのである。地中海問題では英佛ともイタリイを向ふに廻しては事情が一致して居る。フランスは平時でも本國にアルジェリヤやモロッコ等の黒ン坊兵を若干駐屯させて居る。戦時には勿論である。その黒ン坊兵を運んで來る道をイタリイに中斷される。況んやフランス・スペインの出現は佛國に取り背後の一大脅威である。

ソウ云ふ譯でイタリイは地中海に民族とし國家としての全慾求を集中して居る現状であるのだ。ソウした伊太利に取りて目の上の癭であり、苦に悩む重壓でもあるのは何としても英國海軍である。イタリイが支那事変以來日本に對してアンナに努めて居るのも其の爲

である。

(ロ) 日伊海軍協定の必要

對英關係と云ふ角度から云へば、ドイツよりもイタリーの方が餘程眞剣に日本に努めて居る。その代り、若しも或る場合に日本がイタリーに對し薄情な態度でも示さうものならば、ムツソリーニ先生何時かはウンと高い利息を附けて之に返酬することは疑ひない。今日では防共三國の關係の強化が三國民の慾求であることは一點の疑がないやうに思ふ。然るに日本の社會の一部、殊に所謂偉いお方達の方面には防共三國關係の強化には敢て反對せぬが、併し英米には何とかしてヨク思はれたいと云ふ思想が今尚ほ可なり根強く蟠びこつて居るとのことであるが、それは出来ない相談だ。ミュンヘン解決はイギリス人フランス人から云へば明らかにも屈辱であつて、昔我

五三

々が三國干渉を受けたと同じ悔やしさを感じて居る筈である。ソウ
すると、ドイツと親類づき合の日本が「ドイツ、うまく行つたぞ」
と官民共に祝つて居る——私も祝つて居る——そして一方ではイギ
リスからは「よく思はれたい」と色々浮身をやつす。之は出来ない
相談のみならず、所謂二兎を逐ふものは一兎も得ず、得るものは孤
立と輕蔑のみである。況んや曰本はイギリスに對して恐れる必要は
ないのみならず、凡そ此の地球上——天下の大道、物の有りさうな
所は悉くイギリスの領土權又は勢力下にある現状に於て、日本の發
展は、氣の毒だけれどもイギリスの犧牲に於て進んで行くより他に
仕方がない。だから、ドウしても英國に對して曰本と同じ立場に居
る防共三國中の獨伊、就中イタリーとは共通の陣を立てることか國
策の必要のみならず、實に世界の平和維持に貢獻する所以であらう
と思ふ。腹藏なく卑見を披瀝すれば我が民族的國家的慾求の合理的
實現を平和裡に進捗せんがためには曰本が持つて居る海軍力及び之

が與へる國防的地位を此の上にも強化するほかない。その強化と云ふのは外交手段に依つて、日伊間に海軍相互援助協定を結ぶに限る。此の協定が出来れば、恐らく印度洋・西太平洋の波は立たずに茲十年二十年は行けるだらう。この日伊海軍相互援助條約を締結したる後、初めて日英關係の本當の調整が出来ると思ふ。

グヅくして居るとチェムバレンに先に行かれてしまふ。今のチェムバレンの經綸及び政策は何處に在るかと思ふ。今のチエムバレンに在るソレには何をするかと思ふ。西歐の四大強國たる英佛獨伊の間に、歐洲問題、延いては世界問題を、バイ・メソツツオフ・コンサルテイション、相談協議と云ふ方法で處理して行かうではないかと云ふのである。先般チェムバレンがミュンヘンを立つて行く朝、ヒットラーと二人で「英獨兩國國民は互に再び戦争に訴へることを絶対に放さない。兩國間の問題は總て協議の方法に依つて解決すると云ふことに一致する」との共同聲明書に調印したが、ア

五五

レを更に擴大して、フランス及びイタリーをも入れ、つまり四大國
で歐洲政治の最高理事會を造らうと云ふのが、チエムパレンの豫て
からの持論である。チエムパレンとしては、斯くして歐洲を纏め
上で日本問題の料理に取りかゝらうと云ふのである。

五 英獨の武力競争激甚

イギリスのことに付ては、最近に出た *Voissey* といふ人の本に、
英國はワールド・パワーたる地位を失ふことは出来ない。フランス
やドイツは、ワールド・パワーの地位を失つてもグレイト・パワー
スの一ツとして存在することが出来るが、英國に至つては、ワール
ド・パワーの地位を失つた時には、同時にグレイト・パワーとして
の實力をも失つて、今日のスペインやオランダと同じになる。また
文字通りのワールド・パワーなのだから英國ほど国防上脆弱性を持
人

つて居る國はない。英帝國は或る一點でジョイントを叩かれ、は、ソレで世界的帝國としての英國は参つてしまふ。故に英國は強くなければならぬ。マスト・ビー・ストロング、國防を充實して、何處からも指を差されないだけの武力を備へなければならぬ——と言つて居る。尙に道破し得て金的に申つて居る。ただ我々から言はせれば、聊か遅し矣ツ。レイトである。それは私が言ふのではない、ドイツでソウ言つて居る。

ザートルブリュッケンでヒットラーが演説をして、——チエムバレンさんは可^{まう}しい。誠に穩かだ。チエムバレンが平和の爲に努力したことは自^まかも大いに多とする。併しながらチエムバレン内閣が永久に續く譯ではない。イーデンやダフ・クーパーやウインストン・チャーチルなどと云ふ主戰論者が居る。ソウ云ふ手合が政權を執つたら戦争が始まるに相違ないから、ドイツは断じて武力を弛める譯に行かぬ。此上とも強化する積りだ——と言つた。之がイギリス人に

大分反響を興へて居る。そこでドイツは英國の大軍備進行に付てドウ云ふ風に觀て居るかト云へば、幾らでも御やりなさい、だが空軍の現在のバランス、即ち先程言つたロード・ロシアンの、イギリスが今獨逸の空軍の半分レかない、假に一九四〇年の豫定計畫で見ても、イギリスの四千臺に對してドイツは六千臺否或は八千臺即ち倍にもなる。此の優勢はドイツは何處までも維持するといふのだ。丁度アメリカが、對日海軍勢力で條約が有らうが無からうが五・五・三の比率を維持すると頑張つて居ると似て居る。ただアメリカと違ふ點は、アメリカのは其抱負の半分以上は紙上の計畫と云ふ段階を脱しないが、ドイツの空軍は英國のそれに對し、現に確實に二倍の勢力を有つて居り、英國が追れは俺の方も造ると云ふ點にある。従つて英獨の空軍競争は當分續く。空軍制限條約を呑はしては居るが、ソレは、量的制限ではなく、質的制限を意味するものである。量的勢力は何處までもドイツは現状維持で行かうとして居る。ソウ

云ふ譯で、第一に、空軍上の絶対優勢をドイツはどこまでも固持する。第二に、ドイツ西部國境の要塞は、もう今頃は出来てしまったでせうが、如何なる強國と雖もアレを突破することは絶対に出来ないとヒトラーは驕言して居る。即ちフランスのマダノ・ライム以上のものだと云ふ意味です。だから西部國境方面は絶対安全。第三に、チエッコスロヴァキヤは武力的存在としてはゼロになつた、……セロどころではない、今度はドイツの味方をする。コウ観ると、ドイツの地位は非常に強いものである。

六、日英關係

歐洲に於ける英國の地位は、先づフランスの弱體化、それから地中海と云ふ英帝國の大動脈はイタリーからの脅威下にある、その伊太利にとりては地中海は正しく生命線である。斯る環境下の英國と

しては今や國の經濟組織をハイパーソンの演説にも示唆されて居る如
くに、場合によりては獨伊流を加味しての修正をすう敢てしてまで
も國防の高速度擴充に進まんとして居る。或は國民登録法を行つて、
事實上の總動員法や徵兵法を施行しようとするに居る。コウ云ふ
際であるから、日本は英國に對して毫も下手に出る必要はない。下
手に出るのが却て不可。私は初めから——日支問題は、日本が英國
に遠慮せずにグン／＼と眞直に行きさへすれば、イーソン外相の手
を離れて、チエムバレン首相の意圖になる。ソウすれば必ず、チエ
ムバレンは現實政治家であり、ビジネスマンから上がった老練な人
であるから、日本に妥協を求めて来る——と云ふことを言つて居る。
之は昨年七月、雜誌「ダイヤモンド」の座談會で、大口喜六君が同
席で、私は「今度は北支事變などと云ふソナ馬鹿なものではない。
全面的の戦争になる。而して敵は英國だ。だから早く廣東をやらな
ければ不可」と言つと、大口君が「私は外交のことは判りませぬが、

あなたの言はれるやうに英國に對シケン／＼と強硬に行つたら結論はドウなりますか。ソウなれば、曰英問題は必ずイーデン外相の手を離れて、チエムバレン自身の仕事となる、そして必ず日本に向つて妥協を求めて来る。だから平和を早く招來する爲には眞直に行くに限る。今のチエムバレンといふのは、大ロさん御自身のやうな人ですよ。と私は言つた。(笑聲) ソレはドウ云ふことですよ。と聞くから、其の席には、小林一三、松永安左衛門、森島昶、などと云ふ實業家の偉い人が居つたが、「大ロさん、あなたは豊橋の市長から代議士になつた。政治に野心はなかつたけれども、地方の者がせひ大ロさんに出て戴きたいと云ふので、出て来ると、数字の方には特別の頭を持って居られるから、此の通り經濟問題では押しも押されもしない。大權威になられた。あなたなどは、感情や熱や浮氣からで議論を立てる人ではない。今のチエムバレンは兄のオースティン・チエムバレンが父ジョセフ・チエムバレンの衣鉢を承けて弱冠

六一

にして中央政界に飛躍したのと異り、ネヴィル・チエムバレンの方はバーミンガムで親爺関係のビジネスを行って、それからバーミンガムの市長になった。親爺さんも初めはバーミンガムの市長を行って居った。今のチエムバレンは五十歳になる迄は、中央政界に何の交渉もなし、野心もなかった。歐洲戦争の末期に國民奉仕省と云ふものが出来て、兄の推薦に依って二代目の國民奉仕省長官として出て来た。それが中央政界に乗出した初めです。だから、あなたと同じで、自分は政治家になる積りで行ったのではない。市長さんが政治家になつた。あなたのやうに数字が判つて、苦勞人で、浮氣沙汰のない人です。だから必ず私の言つた通りになる。安心して私の意見に附いていらつしやい」と言つた。今度のヒトラーとの折衝に乗り出した始末を見ても大体私の観測通りの人であることが明瞭だ。

私は、イギリスとの関係整調が、世界の強國たる日本の、世界に對する義務だとすら信ずる、しかしそれは英國の手下になつてと云

六二

ことではない。そんなことは眞平御免だ。ソレには英國に對して殺然たる態度を日本が示す。由來最少の抵抗線に沿うて事を爲すのは英人の遵奉する政治哲學である。だから此の原則に従つてベルヒテス・ガルテンに首相が行つたし、その原則に従つて印度は自治的ステータスを許し、アイルランドに準獨立を許したのである。日本に對してだつてソウぢやないか。おとなしくして居れば何處までも付け上がる。ブーく言ふなら、聯盟も脱退する、華府條約もおシマイにする。現實を見せることが可い。廣東だつてソウだ。妙な團體が百姓や労働者の署名まで取つて廣東攻略を建白した。早く行んなければ國內治安の問題だと云ふ迄になつて、行つたところが、成程本多さんの言ふ通り、英國からお小言などは來ない。同盟通信が「チエムバレンが轉向した」と言つて居るが、轉向ぢやない。英國の政治家は浮氣ではない。

議會でチエムバレン首相が「支那の復興にはエライ金が要ります

よ、其んな金は日本では出来ない、我々に頼みに来ますよ」と言つたのは支那が頼みに来ますよと言つた積りで、せう、何も日本の新地位を認めるとか認めないとかの意味がない、財政通たる今氏の常識観を言つたのだ。之も何か裏があるやうに日本の或方面で新聞に書かせたのは誠に突止の極みである。さうかと思へば近着の英國新聞によると、英京財界では聽て講和になりさうだとの氣構へで日本の講和條件まで出て居る、その講和條件として、ロイテル新聞やドイツの電報通信に載つて居るのを見ると、第一項は、蔣介石の代りに汪兆銘がフェーラーになる、行政院長は何應欽とある。之では最近の近衛聲明の「國民政府と雖も従来の指導政策を一擲し其の人的構成を改替して」と云ふのとドウやら照應して居る。第二項は、北支の特殊權益を認めて、北支には兵隊を置くか、南支は無條件で中央政府のものにしてやる——と。ソレが何の爲に廣東まで行つたり、場合に依つては海南島まで行かうと云ふのか、譯が判らぬ。どころ

が少し氣のきいた外國人が見ると、「ハハア、アノ北京電報・上海電報の本音だな」と思ふ。

所が一般の輿論は、ソウ云ふ所を見ずして、「日滿支三國相携へてドウやらして」「東亞を安定し世界の進運に寄與する」、之を列國が認めなければ既得のコンセッションでも取消すぞと言はんばかり。ソウ云ふ意味ではないのだけれども、向ふは僻んでソウ觀て居る。だから爲替も下がれば、米國の軍備擴張に拍車をかける。近來、爲替がザリ／＼下がって居る。爲替が下がると、軍備の上にもコタへる。石油を買ふのにドルが高くなる。私は、爲替問題でも、一シルニペンスなどと云ふ馬鹿なことを何故行ふのか。今度の爲替問題はパウンドが下がったからだらう。パウンドの下がったのは歐洲不安が原因なのだ。殊にミュンヘン協定でイギリスがドイツに押へられた。チエムバレンが何を言はうが、事實ソウである。歐洲の戦争はヒョットしたら來春あたりかも知れないと、パウンドがソウ云ふ心

六五

持だから、ロンドンで買はれたフランスのフランがダラー大の方に身代りしてニューヨークに逃げる。英國の連中もダラーを買ふ。所が日本は一シルニペンスに釘着けして居るから、防共三國で御親類の獨逸が啖呵を切つて英國が開口した。その爲にパウンドが下がった。ドイツにお祝を言つた日本は爲替は下がって居る。之は英米クロスの関係からだ。パウンドが下がればドルが高くなつて圓が安くなる。日本の通貨をパウンドかドルの一定率に釘着けると云ふことが間違つて居る。之は、英國が行やらないところだ、フランスが行やつて遂に失敗した。

此の席には加藤敬三郎君のやうな偉いバンカーも居るが、フランスは世界で第二の正貨を持って居りながら、サウンド・マネー、ゴールド・レイトに釘着けした爲に参つてしまった。英國は一九三一年に金本位を離脱したが、決して釘着けせず、爲替をして自然に落ち着く所を見出さしめた。但しスペキュレイトアの買煽りや賣投げ

を防ぐ爲に、爲替平衡資金三億パウンドを設けて隨時出動する。日本は事々に英國の眞似をするのに、爲替政策だけは、成功した英國流には行かないで、失敗したフランスの眞似をして居る。之はドウ云ふ譯か私には判らない。親類にお祝ひするやうな事がある度に日本が困って、アメリカから買って居る物が高くなつては、戦争遂行にも障害がある。また一シルニペンスを維持する爲に、輕工業の原料品たる棉花や羊毛までも制限して、その結果、輸出貿易は全く上がったりになつた。上がったなりになつてしまへば爲替が又下がるから、之はガイシヤス・サークル、底の無い連環線だ。日本の財界の巨頭連、頭の良い人達がコウ云ふ事を行つて、正直な國民は一シルニペンスを御詔敕の如く確定不動だと思つて居る。

あまり悪口を言ふと不可いけなから、暴言多罪、この邊で止めて置きます。(拍手) — (了) —

Re; China, and Europe, HCNDA justifies his stand for an immediate attack on Canton, and the ignoring of any subsequent protest by Britain.

He says, "Japan does not need to fear Great Britain.... Expansion of Japan is only possible, when her policy is carried out at the expense of Great Britain..... The enemy is Britain."

Analyst: ~~W. H. [redacted]~~

Dec. No. 3081
Page 2

INTERNATIONAL PROSECUTION SECTION

Dec. No. 3081

Date 14 July 1947

ANALYSIS OF DOCUMENTARY EVIDENCE

DESCRIPTION OF ATTACHED DOCUMENT

Title and Nature: Mimeographed Pamphlet, "Lecture on Diplomacy Relative to the Incident," by HONDA, Kumatare. (67 pp)

Date: December 1938 Original Copy Language: Japanese

Has it been translated? Yes No

Has it been photostated? Yes No

LOCATION OF ORIGINAL

Document Division

SOURCE OF ORIGINAL

Japanese Foreign Ministry

PERSONS IMPLICATED:

HONDA, Kumatare

CRIMES OR PHASE TO WHICH DOCUMENT APPLICABLE:

Relations with Germany; Propaganda for aggressive Warfare.

SUMMARY OF RELEVANT POINTS

This lecture was given before the Japan Foreign Relations Society in December 1938, and published by that body.

In his talk, HONDA, former Ambassador plenipotentiary in CHINA, urged that a strong stand be taken against Britain and America, that Canton be attacked, and that rapprochement with the Axis powers be sought as quickly as possible. In short, he advocates power politics as an instrument of national policy, believing that strong diplomacy is possible only when accompanied by military power.

For example he argues that the U.S. protest of 6 October 1938 relating to the China Incident can be disregarded because it is not supported by any concrete measures, and further the U.S. will not resort to arms to enforce her will. Force compromise, he says by carrying out positive measures.

Dec. No. 3081

Page 1

3081

Name of Author: HONDA, Kumataro

Title of Pamphlet: "Lecture on Diplomacy
Relative to the Incident"
December, 1938

Name of Publisher: The Japan Diplomatic Society

In this lecture, the author advocates power politics as an instrument for national expansion. He believes that execution of strong diplomacy is only possible when it is supported by strong military power. "Weak diplomacy is the product of weak defense".

In the first half of the lecture, the author discusses on American-Japanese relations in connection with the U. S. protest which was lodged with JAPAN on 6 October, 1938, relating to the China Incident. According to the author, the protest is nothing but a matter of formality because it is supported by no concrete measures. The U. S., in his opinion, is not prepared to resort to arms or economic measures to enforce her will

After making critical analysis
of the U. S. domestic and foreign
affairs, he assumes that
the protest was made ^{rather} for the
sake of home consumption
with a view to enhance the Roosevelt
Administration's position in
the fall elections and to muster
the public opinions ^{toward} expansion
of armaments. ^{However,} he points out
that the protest itself is a mere
amplification of President
Roosevelt's quarantine speech

made on 5 October, 1937.

In conclusion, he states that as long as the U.S. insists her traditional policies in the Far East, viz., open-door and equal opportunity policies, and the Nine-Power Treaty, "there is no hope to make her change her attitude toward JAPAN other than to make her compromise with us in the course of actual developments led by execution of our own positive measures"

In the latter half of the lecture,

the author discusses on the European situations pointing out that the Axis powers are expanding their sphere of influences through power politics, ^{being actually} supported by strong arms, while influences of the democratic nations such as GREAT BRITAIN and FRANCE are ^{rapidly} declining due to their military unpreparedness. In this connection, he justifies his assertion for immediate attack against Canton ignoring subsequent British protest

Taking advantages of the weakening
British influences in the world
politics, he also advocates
JAPAN'S direct challenge against
GREAT BRITAIN in collaboration
with GERMANY and ITALY. He
says :

" JAPAN does not need to fear
GREAT BRITAIN. In view of the
fact that almost all of the
important sea routes and
resourceful areas on the earth
are under the British control,
expansion of JAPAN is only

possible when her policy is carried
out at the expense of GREAT BRITAIN.

Therefore, I believe that it is
absolutely necessary for JAPAN to
collaborate with GERMANY and
ITALY who are in the same
positions with JAPAN in opposing
GREAT BRITAIN, and, particularly,
that formation of a common
front with ITALY is not only
necessary for our national
policy but also for the
maintenance of world peace"

Furthermore, he states that "in order to peacefully promote the national realization of our racial and national desires, JAPAN'S naval power and its role of defense should further be strengthened, and, for that purpose, conclusion of a naval defense agreement between JAPAN and ITALY is advisable."

The author believes that ^{the} real adjustment of Anglo-Japanese relations can be expected only after such an agreement is concluded. -8-